

観音扉の作り方

～漆喰の材料編～

左官吉田 代表
吉田 一正

中編②（本誌2022年3月号）では、中塗り「戸表」まで紹介頂きました。今月号では漆喰を練る前段階で、材料について紹介いただきます。（編集部）

南部角又

③⑦中塗りが乾燥した後も、すぐさま上塗りにかかることはせず、しばらくは養生を続ける。大気中の水分が、土や骨材に含まれる鉄分と反応し、中塗り層の表面は、まるで生きているかのように表情を変えていく。土が赤黒く色味を帯びてくること、これが「さび」だ。

鉄に覆われた中塗り面は、固く、強くなり、なおかつしなやかで水にも負けないため、上塗りの水引き斑や、その後の故障を起こしづらくする。やがては、表面近くにある中塗り筋が風をさえぎるので、さびを呼ばずに白く浮き上がって見えてくる。ここが漆喰のかけ時だ。

では、中塗りを養生している間、ちょっと糊の話しよう。

こと漆喰塗りにおいて、海藻糊は糊とは言え接着力を望むものではない。塗り付けた後の漆喰に十分な水分を保たせ、完全な場を作り上げるための作業時間を確保するものである。つまり、保水材という表現が正しい。

もともと米のでんぷん糊を使って作られていた漆喰は、とうぜん高価であり、城郭建築や大名屋敷を除いては、さわることさえまならなかった。漆喰が普及するきっかけとなったのは、武家の世の衰退、そして何より、無名の天才による海藻糊の発明だろう。

漆喰を作るのに使う葉物原藻類＝昆布は主に2種類。銀杏草（ぎんなんそう）と角又（つのまた）である。どちらも工業用昆布、雑昆布という部類に入り、養殖されているわけではない。いわば海中の雑草だ。

銀杏草は、イチョウの葉に姿が似ていることからその名がついた。地方によっては仏の耳、また単に耳とも呼ぶ。北海道、本州北部、太平洋北部沿岸に生息し、黒葉（くろは）と赤葉（あかば）の2品種がある。高級とされているのは黒葉の方だ。特に、北海道日高産のものを最上とする。糊質はあっさりしており、鋳運びも軽い。また、食用としても珍重されている。

反面、その糊質が、上塗りに砂漆喰を使わない関東・東北地方の施工法には不向きであり、役摺り（やくずり）：

漆喰塗り付け直後の伏せ込み・目つぶし作業の（こと）の際、材料を付け送りながら進めないと壁の乾きについていられない。結果、角又で練った漆喰に比べ、およそ2倍の量の材料を必要とすることとなる。また、水揚げ量が極めて少ないこと、必然、高価であることも負の要因ではある。

③⑧鹿の角に似て、股状になっている姿から角又と称される雑昆布は、日本各地、朝鮮半島、南米等の沿岸に生息域を持つ。福島、茨城、千葉の一部地域を除いては食用ともせず、左官、及び、染織材料としてのみ扱われる。

糊質は採取地でまちまちである。よって、特性をよく知った上で使用しなければならない。

「近海物」と銘打って取引されている葉物角又は韓国産の銀杏草であり、粘りが強く、鋳運びも重い。国産に比べ安価であり、保水性も高いが、皮張り（壁の表面だけが乾き、内部で糊が濃んでしまう状態）しやすく、糊量の調整が難しい。加えて、海産物特有の腐臭がきつい。ちなみに、これを一度蒸し上げ、乾燥後粉碎したものがインスタント海藻糊である粉角又の最高値品「金印」である。

南米産の葉物角又は、よほど望まない限り市場に流通することはない。その大半は安価な粉角又「赤印」「青印」の原料である。保水性は期待すべくもなく、化学糊が添加されている。ひたすらに安いことが特徴であり、左官工事に使用するのはいかがなものかと思われる。

葉物角又は、三陸沿岸で採取される「南部角又」に限る。糊質、保水力、作業性、どれをとっても間違いない。採取場所をここより北上すれば糊質はあっさりとなっており、南下したものは糊を焚き終わるとたちまちに煮凝り化してしまう。よって、岩手県北部や青森産の角又に保水力はそれほど期待できず、福島や茨城、千葉県産の角又では、練り上げた材料がすぐに硬くなってしまい、塗り付けることもままならない。

南部角又のなかでも特級とされてきた岩手県南部産のものは、昭和50年代初頭から水揚げされておらず、現在では、宮城県気仙沼産を三陸ものの最上とせざるを得ない。

角又は、二期作のように、1年のうち春と秋、2度の収穫期を迎える。質が高いのは、もちろん新昆布である春物であり、ぜひともそちらを確保したいところだが、そ